

# 職員アンケートか 帰宅困難と

市立八幡浜総合病院

○川口 久美、越智

菊地 栄治、坂

本

# ら、災害時通勤・ 備蓄を考える

救急・災害対策委員会

元郎、宮谷 理恵

耕一、坂本 利治

## 【研究の背景と目的】

八幡浜市は、海と山に囲まれた、漁業が盛んな地域です。遠くない将来、南海地震や東南海地震による被害に遭遇することが考えられています。その被害が甚大である場合、各地からの支援を受けることは、難しいかもしれません。今回、当院全職員に対しアンケート調査をおこない、災害時に通勤・帰宅が可能かどうか、宿泊を希望するかなど について調べました。

その結果から、特に職員の通勤・帰宅困難と災害用備蓄のあり方について考察しました。

## 当院は様々な災害時ハザードに取り囲まれている



## 【研究の背景と目的】

平成24年1月、非常勤・委託を含む全職員の410人に14項目なるからアンケート用紙を配布し、98.5%にあたる404人から、無記名で回答をいただきました。



伊方町の風車と三机湾

## 今回分析の対象とした項目

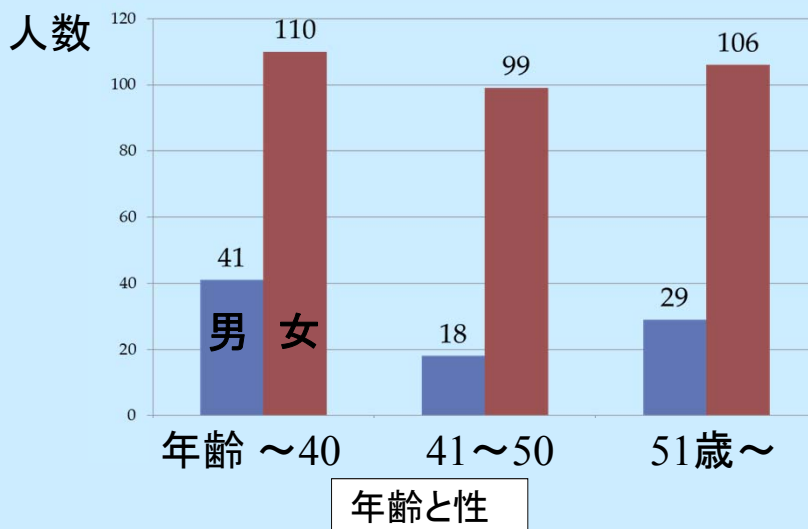
1. 職員の背景—年齢、性、職種など
2. 居住地と通勤距離
3. 通勤困難：在宅中に発災し、自動車や公共交通機関で通勤できなくなった場合に来院できるかどうか。
4. 帰宅困難と宿泊希望：勤務中に被災し、自動車などで帰宅できなくなった場合に帰宅するか、帰宅は困難で病院に宿泊したいか。

- 5. 自宅から伊方原発までの距離
- 6. 放射線災害時の宿泊希望：放射線災害がおり  
当院が避難指示区域内に含まれた場合に、  
入院患者の避難が終了するまで、病院に宿泊  
したいか？

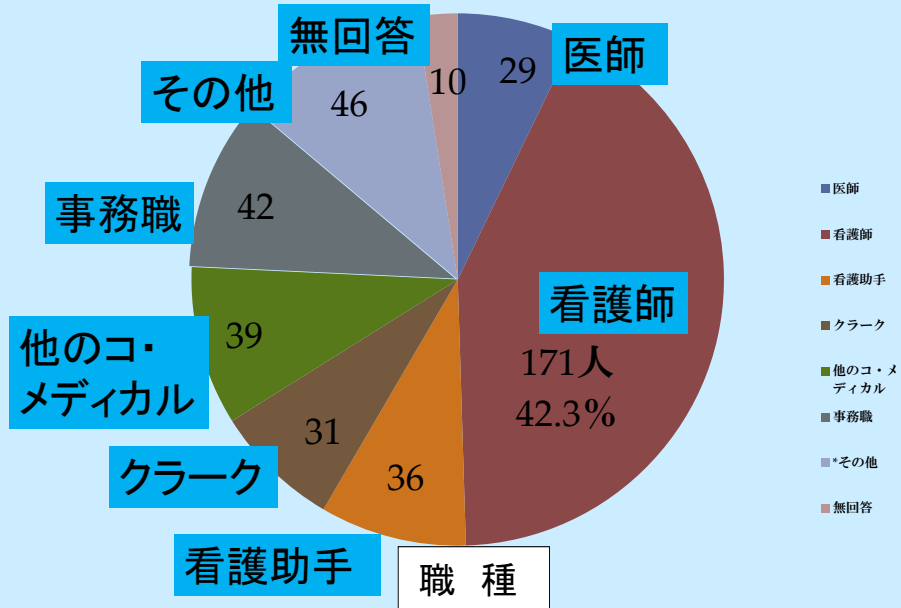
以上の、6項目です。

### 1. 回答者の背景－①年齢と性

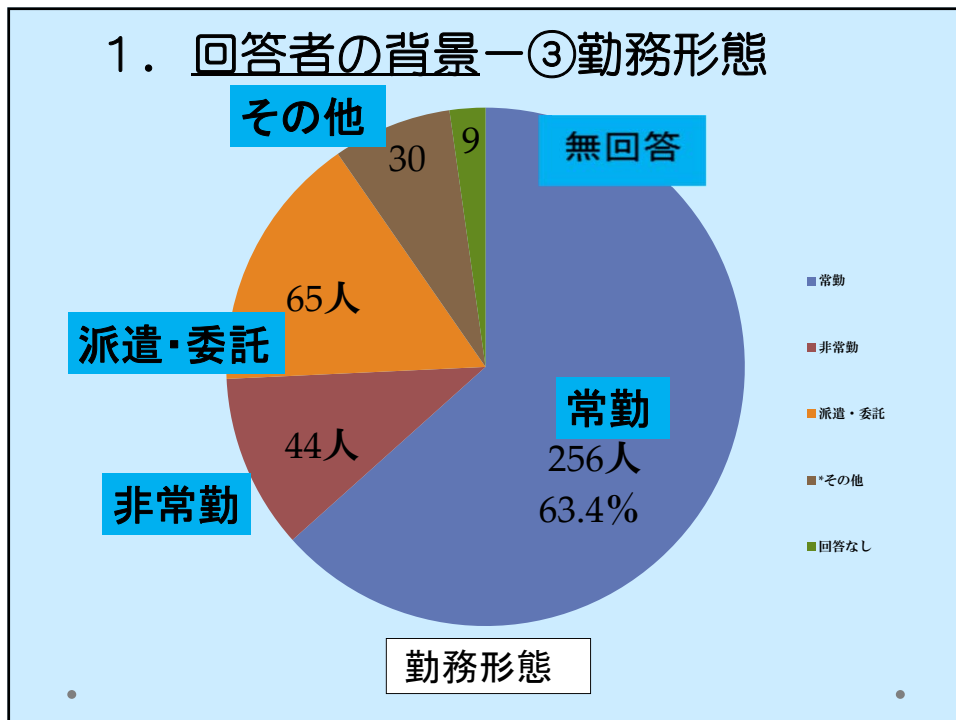
男性88人(21.8%) 女性316人(78.2%)



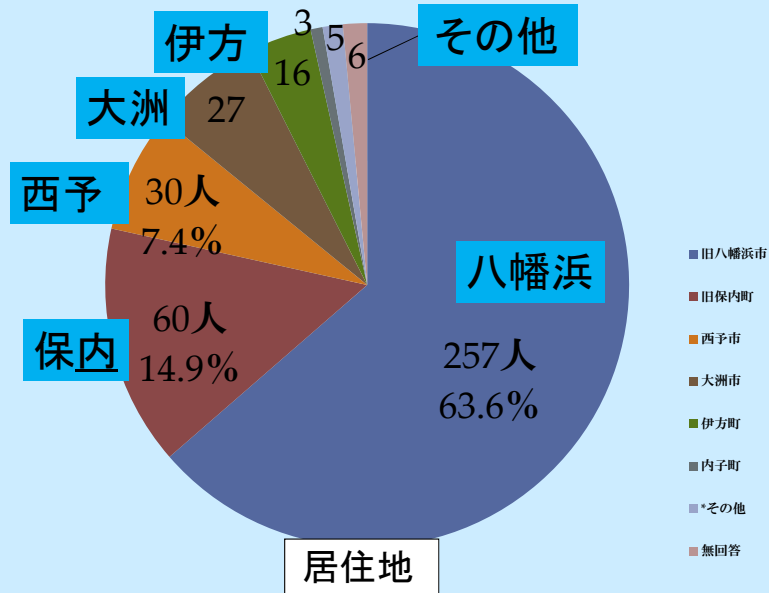
### 1. 回答者の背景—②職種



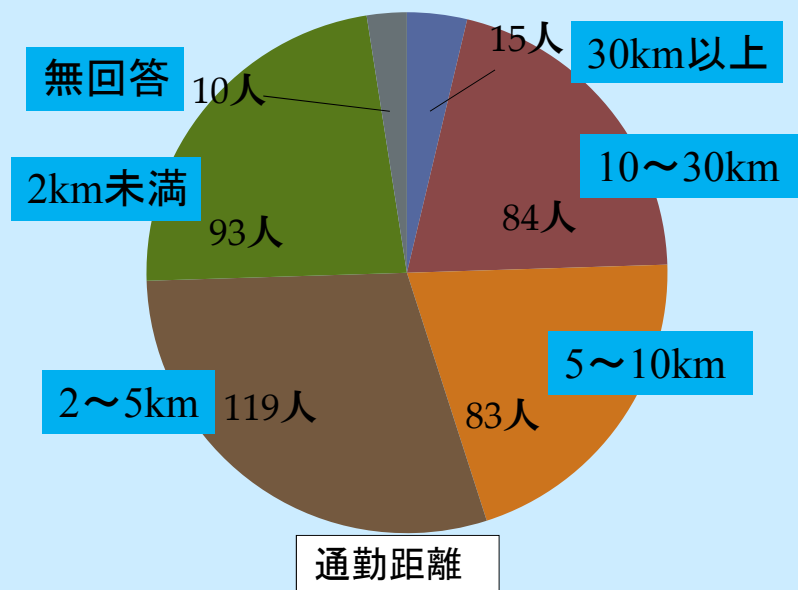
### 1. 回答者の背景—③勤務形態



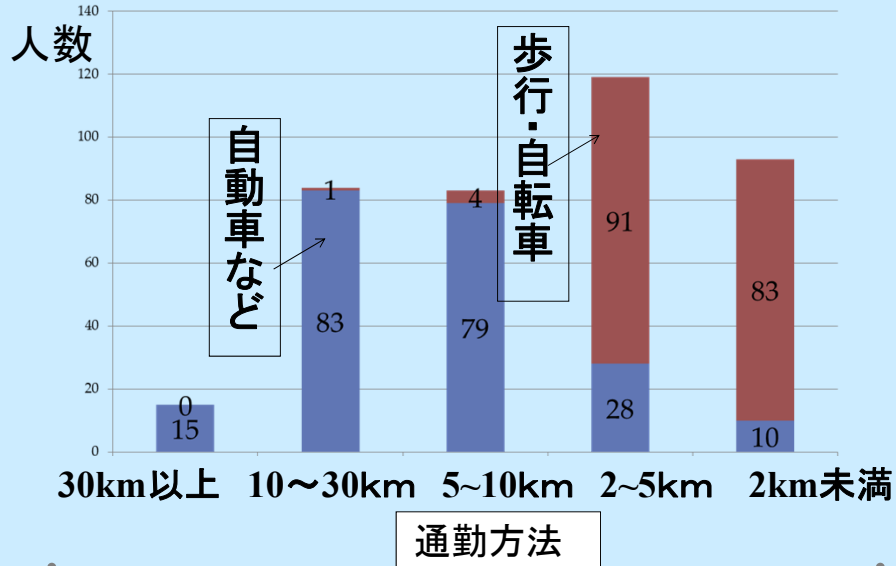
## 2. 居住地



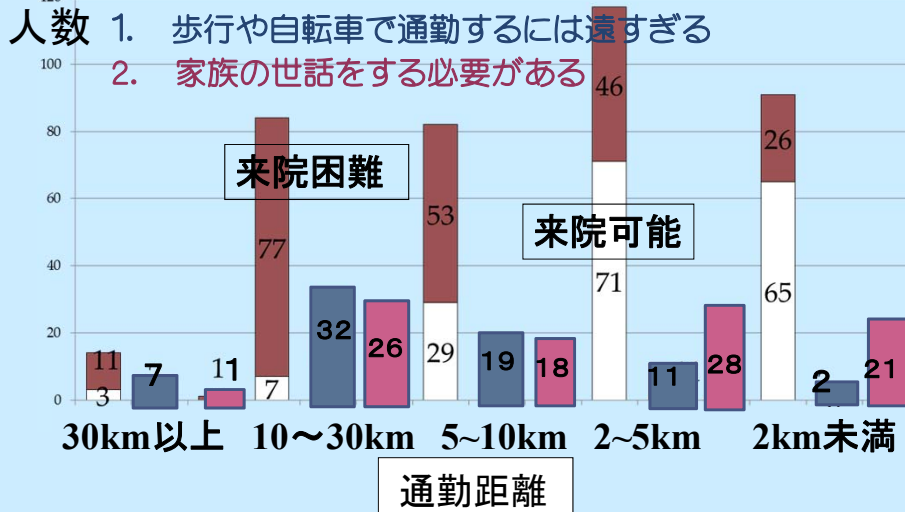
## 3. 通勤距離



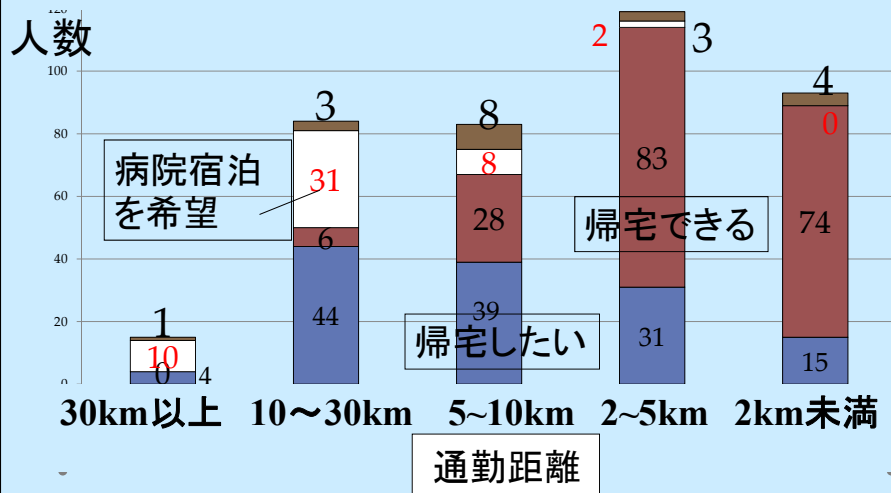
#### 4. 通勤方法



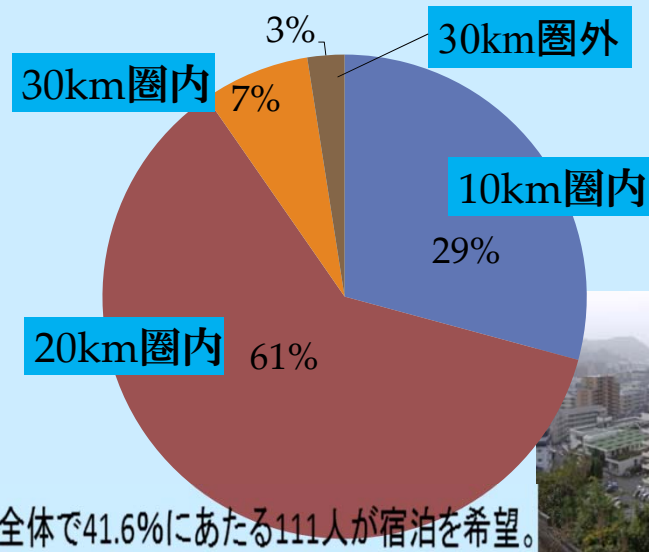
#### 5. 通勤困難：在宅中に発災し、自動車や公共交通機関で通勤できなくなった場合に来院できるかどうか



6. 帰宅困難と宿泊希望：勤務中に被災し、自動車などで帰宅できなくなった場合に帰宅するか、帰宅は困難で病院に宿泊したいか。

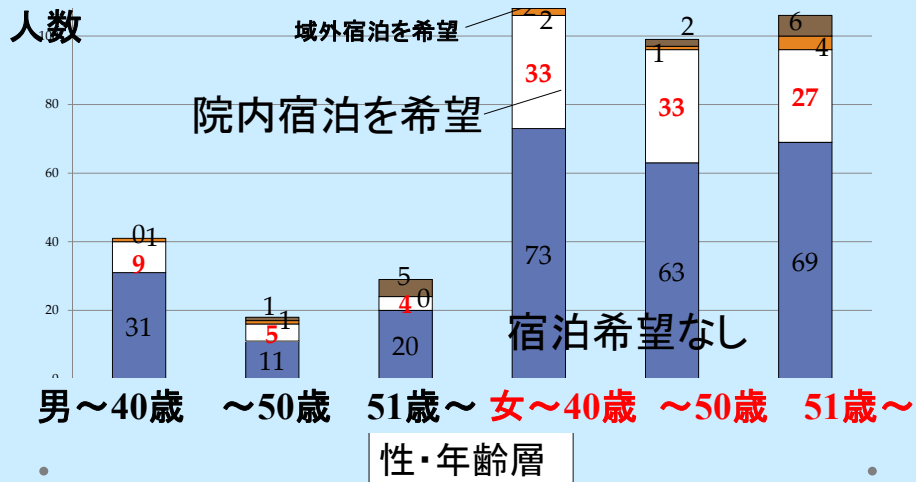


7. 自宅から伊方原発までの距離





8. 放射線災害時の宿泊希望：放射線災害がおり  
 当院が避難指示区域内に含まれた場合に、患者避難が  
 終了するまで、病院に宿泊したいか？



【考察と結論】

1) 勤務時間外の自然災害で道路が寸断された場合、  
 職員の半数以上が、来院が難しいと答えました。

これは職員が、災害時の長時間にわたる激烈な勤務、  
 院内の宿泊環境が十分ではないこと、勤務後の帰宅も  
 また、困難となることなども予測し、災害時の出勤が  
 容易なものではないという、おそれを表したものと  
 考えられます。

一方、勤務中に自然被災に遭った場合に、宿泊を希望

する職員は約50人でした。

また、放射線事故のために通勤時に被ばくする恐れのある状況では、100人以上の職員が、自身が遠隔避難できるまで、病院に宿泊を希望するとみられます。

2) 当院の現在の食料備蓄は、入院患者200人分の3食分です。これは診療活動をする職員の50~100人を考慮した場合、十分ではありません。

災害の規模にもよりますが、八幡浜が孤立することを想定すると、食料を含め、寝具や宿泊場所の確保についても、事前の十分な計画が必要と考えられます。

3) 災害時にできるだけ多くの職員に参集してもらうためにも、食料備蓄や宿泊環境などの準備が必要と考えます。

今後、病院として取り組んでいきたいと思います。